

第3章 授業づくりの実際



小学部の授業づくり

1 選定した学習の説明

「エンジョイタイム」は、令和2年度までの研究を受けて本年度から設定した学習である。主眼として、児童の興味・関心を広げたり、深めたりすること、児童を取り巻く地域を少しずつ広げることがある。そのために、児童一人一人が安心できる環境の下、身近な友達や教師と一緒に、様々な「ヒト・モノ・コト」との関われるような環境や題材を設定した。

本年度は、生活単元学習の中に「エンジョイタイム」の時間を週1時間設け、題材によって学級単位、学年合同で授業を行った。

本年度は、エンジョイタイムで扱う題材、単元計画及び評価の方法について検討する。エンジョイタイムと「生涯学習力」のつながりを整理し、児童の興味・関心を広げたり、高めたりするために適切な題材を選定できるようにする。また、児童一人一人の生涯学習力の高まりを評価できるように、児童の姿を見取る視点を検討することを目的とした。

2 内容

(1) 生涯学習力を高めるための教育課程の編成

令和元年度までの研究において、生涯学習力を高めるためのキーワードとして、児童生徒の興味・関心を広げること、物事に没頭・熱中する経験を積み重ねること、そして、児童生徒が学校卒業後に地域で暮らしている姿のイメージを教師がもち、指導・支援を行うことが挙げられた。

令和2年度の研究では、「楽しむ」視点から、「学ぶ楽しさ」を実感すること、地域と共に子どもたちの学びを支えることが「生涯学習力」を高める教育課程の編成に必要な点であることが示唆された(図1)。特に、小学部段階では、様々なことに触れ「面白い!」と気付くなど心を動かす経験を積み重ねることで、「面白いからやってみよう」「楽しいから次はこうしてみよう」といった、学ぶ楽しさを知り、自ら学びに向かう「生涯学習力」の素地が育まれるとされている。



図1 生涯学習力を高めるために必要なこと

(2) 生涯学習力と小学部の児童の実態

前年度までの研究を踏まえ、小学部の児童の実態を見ると、好きなことや興味のあることの偏りが大きいこと、同年代の小学生と比較して、様々な物事に関わる経験が少ないことが挙げられた。そこで、様々なヒト・モノ・コトに触れながら、学ぶ楽しさを実感できる場としてエンジョイタイムを設定した。

(3) 「生涯学習力」につながる「エンジョイタイムで大切にしていること」の検討

①エンジョイタイムにおける「生涯学習力が高まった姿」の捉え

本校では生涯学習力を「主体的にヒト・モノ・コトに関わり、生涯にわたって学びに向かい、成長しようとする力」と定義付けている。小学部の職員全員で付箋紙によるワークショップを行い、エンジョイタイムにおける生涯学習力が高まった児童の姿について意見を出し合い整理し、5つの要素に分類した(図2)。エンジョイタイムの授業では、これらの要素に当てはまるような、児童の姿を引き出すことを共通理解した。

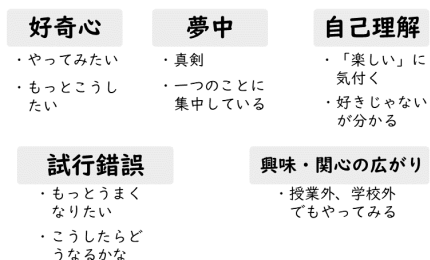


図2 エンジョイタイムにおける「生涯学習力が高まった姿」

②児童の姿から「エンジョイタイムで大切にしていること」の精選

実際に授業を行い、児童の姿を見取り、授業づくりWGと連携しながら、随時5つの要素の検討、修正を行った。授業づくりの指針として活用していることが分かるように、名称を「生涯学習力につながる『エンジョイタイムで大切にしていること』」へ、変更した(図3)。

(4) 授業実践と「エンジョイタイムで大切にしていること」を用いた評価

学級単位で行うエンジョイタイムの題材は「児童の実態(興味・関心のあがる活動含む)」、「ねらい(「生涯学習力」を高める視点「かかわる・きづく・やってみる)」」、「予想される児童の楽しむ姿」の項目で検討し、設定した。毎時間の児童の様子を、エピソードとして記録した。

①授業・題材の評価

設定した題材が生涯学習力につながるものになってきたかを、児童のエピソードを用いて評価した。児童一人一人のエピソードを「大切にしていること」の5つの要素で整理し、題材ごとに多く見られた要素を抽出した。結果、題材によって多く見られた要素が異なることが分かった(表1)。

表1 「大切にしていること」の要素別 題材ごとの多く見られた児童の姿

ふたば1・2年生 「カメラ」	好奇心	人との関わり	自己理解		
わかば3・4年生 「そめもの」	好奇心	人との関わり			夢中
あおば5・6年生 「ユニバーサル スポーツ」		人との関わり		試行錯誤	夢中
学部・中学部合同 「卒燈」	好奇心	人との関わり	自己理解	試行錯誤	

②児童一人一人の変容の評価

ヒト・モノ・コトに対する興味・関心の広がりや、何かに夢中になるといった姿は、1時間の授業の中だけでは変容を見取りにくい。そこで、エンジョイタイム実施前の年度当初の姿と、題材終了後の姿を「大切にしていること」の5つの要素で比較した。その際に、児童のヒト・モノ・コトへの関わり方を記録することで、児童が得意な関わり方が明らかになった(図4)。

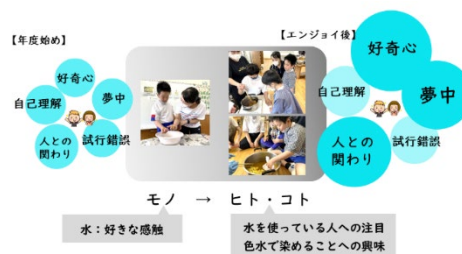


図4 児童Aにおける5つの要素の変容

3 今後に向けて

授業の実践を通して、授業と児童の様子を評価する観点を整理することができた。次年度は「大切にしていること」の5つの要素を基に授業づくりを行い、妥当性を検証するとともに、児童一人一人の「生涯学習力」につながる要素の変容を丁寧に見取り、授業へ反映する流れを構築していく。

中学部の授業づくり

1 選定した学習の説明

本校では、中学部生徒18名がファーム班、クラフト班、ソーイング班の三つの班に分かれて作業学習を行っている。昨年度までの研究では、「働く、暮らす、楽しむ」中の「働く」にポイントを置き、ワーキンググループで考案した、働く意欲を高めるための教育課程の編成のポイント「ストーリー（働く上での目的や楽しみを見付ける）」「気付き（自分自身を知る）」を基に、作業学習の検討をした。

これまで、手工芸や紙工、縫製など手元を見ながらじっくり集中できる作業を中心に作業班を編成していたが、多様な生徒の実態などから体を大きく使う作業種も取り入れたいと考え、今年度から農作業を中心としたファーム班を新設し、3つの班編成で作業学習を行っている。

班	作業内容	求められる力
ファーム班	トマトの栽培、花の栽培など生き物を相手にする	粗大な体の動かし方をする
クラフト班	クラフトテープでコースター作りをする	手指の巧緻性 正確に計る
ソーイング班	ミシンや染め物の布を使ってトートバックの制作をする	安全に機械操作・技術が必要

2 内容

(1) 作業のねらい

中学部では、作業学習の本来のねらいである将来の職業生活や社会自立に必要な意欲、態度などを大切に指導をしている。「生涯学習力」を高める視点で考えた場合、中学部作業学習では「働く喜びを知る」ことをねらいとすることが重要だと考えた。中学部に入学し、作業学習を経験し、働くことのやりがいを感じたり、人の役に立つ経験を積み重ねたりすることは、作業学習に取り組み始めた中学部の生徒にとって社会参加に必要な資質・能力を育むために非常に重要である。さらに、作業製品を販売する経験を積み重ねることで、お客さんに喜んでほしいという気持ちを育みながら、作業に向かう意欲や態度の向上につなげたい。また、作業工程や作業のきまりに沿って製品を製作したり、そのときの状況を考えながらトマトや花を育てたりする経験は、物事について深く考え、判断する力を養うと考える。

以上のことから中学部では、「働く喜びを知る」ことが主体的にも、人と関わり、自分の役割を認識して自ら行動していく姿につながると考え、作業学習において「働く喜びを知る」ことをこれまで以上に重視し、学びに向かう態度を育てていきたいと考えている。

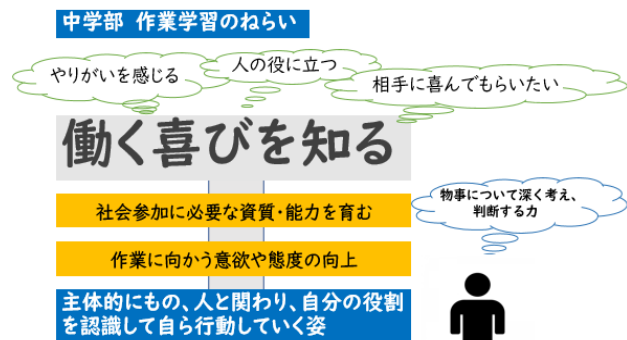


図1 中学部の作業学習のねらい

(2) 「生涯学習」につながる「授業づくりの要素」の検討

「生涯学習力」につながる「作業学習で大切にしていること」を学部職員で検討した。「生涯学習力」、すなわち生徒たちの将来につながるような作業学習の授業づくりを考えるに当たって、我々教師が大切にしている「授業づくりの要素」を学部で話し合い、興味・関心の広がり、自己選択自己定、

生涯学習力につながる「作業学習で大切にしていること」



図2 「生涯学習力」につながる「作業学習で大切にしていること」

興味・関心の広がり	作業学習の経験を通して興味・関心の幅が広がる姿。本校中学部には3つの作業班があり、様々な作業を経験し、生徒の興味・関心を広げることで、生涯学習力につながると考える。
自己選択・自己決定	自分の考えをもち、「〇〇の作業をしよう〇〇がやりたい」など自分で判断して作業する姿。自分のやりたい作業を選択して作業する班、工程が決められている班など様々であるが、自己選択・自己決定の場面を取り入れた作業学習が必要と考える。
やり遂げる力	作業で失敗をしたり、うまくいかないことがあっても次に挑戦したり、生かしていこうとする姿。失敗すること、うまくいかないことはあるが、「次はうまくやろう、何とかよくしよう」と考えることが必要であると考え。
自己理解	自分の得意な作業、苦手な作業が分かる、集団の中での自分の役割が分かることである。作業学習の授業を重ねることで、得意な作業、やりたい作業、少し苦手な作業などを少しずつ理解できるようになってくる。その上で、自分のできる作業に取り組むこと、少し苦手なことを伝えること、今は全体の中でどの辺りを作業しているのか分かって作業することなどが必要であると考え。
試行錯誤	製品をよりよくしようと考えたり、失敗を基に工夫したりすることを通して、効率や製品のクオリティ、出来高などを考えて作業することである。作業学習を始めた1年生にとっては少し難しいことではあるが、作業学習の経験を重ねてきた2、3年生はよりよい製品を作ることができるように考えたり工夫をしたりすることが求められる。そのようなことを経験することも必要であると考え。

やり遂げる力、試行錯誤、自己理解の5つを導き出した。詳細は次のとおりである。

3 今後に向けて

(1) 成果

3つの作業班で「生涯学習力」につながる「作業学習で大切にしていること」を基に授業づくりをした。学部の授業研究会、授業づくりワーキンググループを通して「大切にしていること」を検討し、5つの要素を導き出し、中学部で育みたい「生涯学習力」の具体化ができたことが一番の成果である。

この5要素を授業づくりの際の教師の手立てとして生かしたり、生徒の変容を見取る際のポイントにして、エピソード記録を基にしたカンファレンスをしたりすることで学部職員が共通の視点を持ちながら作業学習の授業づくりを進めることができた。

(2) 今後に向けて

生徒が今後、卒業後、社会に出てよりよく生きていくためには、様々な場面で身に付けた資質・能力を発揮しながら生きていくことが重要である。そのために次年度は、今年度導き出した「大切にしていること」を教師が手立てとして授業に反映し、それらを通して、生徒が身に付けた資質・能力を作業学習以外の授業場面で生かすことができるかを検証し、実践していきたい。

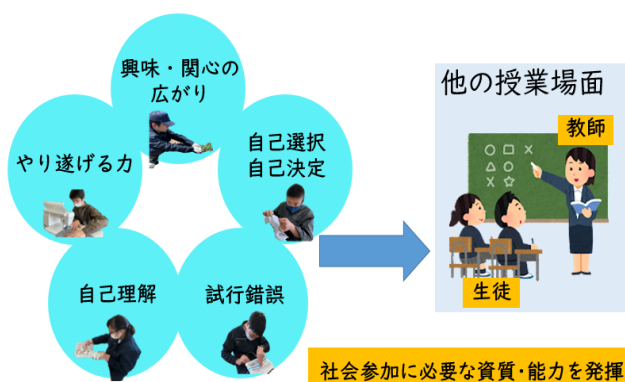


図3 来年度の実践について

高等部の授業づくり

1 選定した学習の説明

Dスタディは令和2年度からスタートした高等部学年縦割りグループによる学習である。DスタディのDは、Discovery(発見)、Do(やってみる)の頭文字から取っており、生徒の実態や教育的ニーズを基に、知的好奇心を喚起しながら、問題発見・問題解決型の学習を行い、生徒の「生涯学習力」を高めることを目指している。

2 内容

(1) 「Dスタディで高まるであろう生涯学習力」の検討

高等部ではDスタディを研究の対象授業とし、年度当初、育成を目指す資質・能力の3つの柱を基に、各学習グループで「Dスタディで育てたい力」を設定し、それらを集約し「Dスタディで高まるであろう生涯学習力」を設定した。「Dスタディで高まるであろう生涯学習力」は、「自己理解」「実行力」「情報活用力」「社会性」「自己選択・自己決定」とした(図1)。

「情報活用力」「社会性」「自己選択・自己決定」とした(図1)。

(2) 生涯学習力を高めるための授業づくり

①エピソード記録を活用した学部カンファレンス

抽出生徒の学部カンファレンスを行い、3つの点について意見を出し合った(図2)。

②学部カンファレンスを生かした授業づくり

学部カンファレンスの内容を生かして授業づくりに取り組んだ。検証授業はDスタディ花グループ「通町商店街のCMを制作しよう～相手に伝わる動画制作とは～」である。花グループは、3年生男子4名の学習グループであり、全員、一般就労を希望している。本単元における授業づくりの具体的なポイントは図3のとおりである。また、学習指導案の単元設定の理由、生徒のねらいや手立ての文末に「Dスタディで高まるであろう生涯学習力」のキーワードを記載し、授業者、参観者が生涯学習力を高めるための授業づくりの共通の視点をもって検証した。本単元の実践を通して、様々な人の考えを受け入れ、よりよいものにしようとする気持ち【社会性、自己理解、実行力】を高めることにつながる実践を行うことができた。

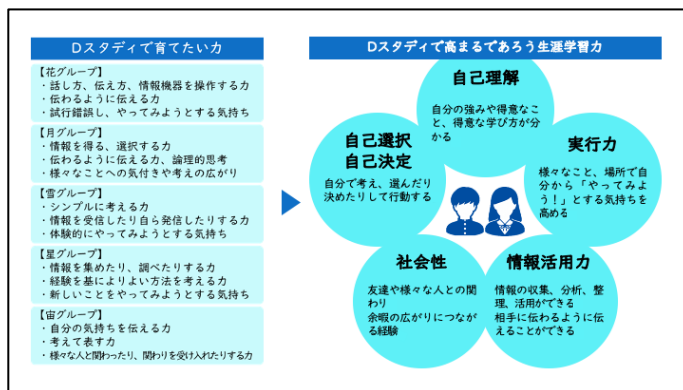


図1 「Dスタディで高まるであろう生涯学習力」

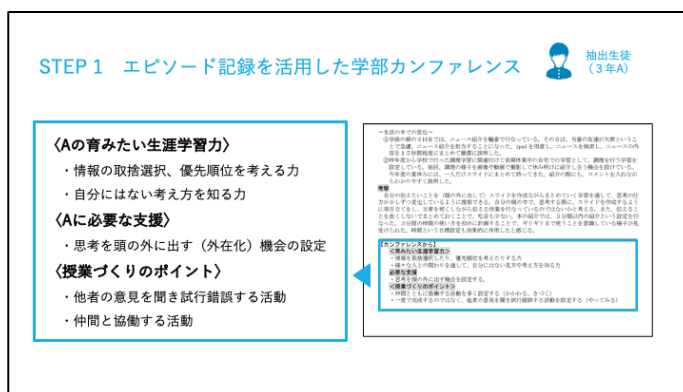


図2 カンファレンスの内容について

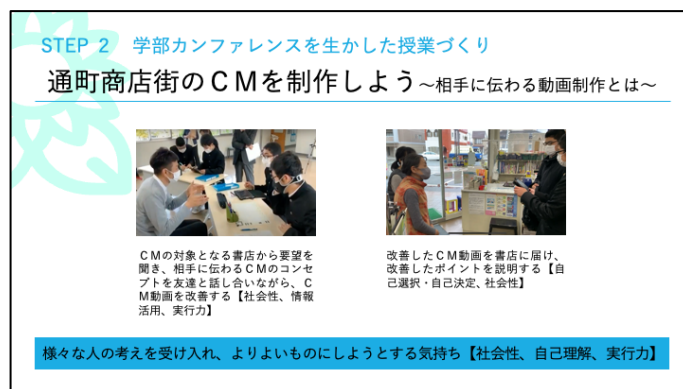


図3 授業づくりについて

③授業研究会の実施

本学准教授、谷村佳則先生をお招きした授業研究会では、「動画編集における自分の強みや得意なことを生かしながら友達や教師、地域の方など、様々な人（他者）の気持ちを受け入れて動画を改善するということは、自分の考えや気持ちを調整する「自己調整」する力が求められていた。また、様々な人（他者）とのやり取りの中で、自分の強みや得意なことを相手や状況に合わせてどのように使うかを考える、自己理解を深めるきっかけになっていた。さらに、この学びの成果を『般化』し、他の学習や普段の生活の中で生かすことが大切である。学びの成果の積み重ねが問題解決に向けて進んでいく生徒の原動力となる。」といった助言をいただいた。

3 今後に向けて

(1) 「Dスタディで育てたい力」, 「Dスタディで高まるであろう生涯学習力」の見直し

改めて各グループで資質能力の3つの柱を基に「Dスタディで育てたい力」の見直しを行った。どの学習グループも「学びに向かう力、人間性等の涵養」の内容と「自己理解」を関連付けることができた。これらのことを踏まえ「生涯学習力につながる『Dスタディ』で大切なこと」を完成させた(図4)。

(2) 公開研究協議会意見交換会から

公開研究協議会、意見交換会では「卒業後の学びに接続する生徒の自己理解を深める実践」のテーマの下、参加者からの実践を紹介していただきながら意見交換を行った。

以下意見交換会からの抜粋(図5)

- ・他学部での作業学習体験を通して、自分が得意だと思っていたことがまだ力不足だということに気づき、改めて目標を設定する姿が見られた。
- ・ICT機器を活用し、自分の取組を俯瞰して捉え、客観的に振り返ることで自己理解が高まる。
- ・在学中から、福祉、行政等と連携し、学びを接続していくような取組が必要である。

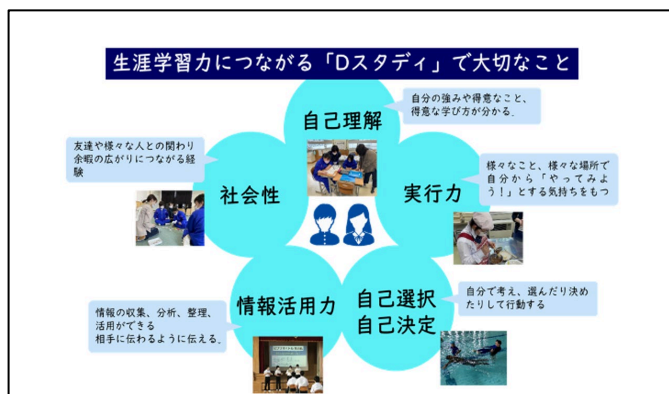


図4 「生涯学習力」につながる「Dスタディ」で大切なこと

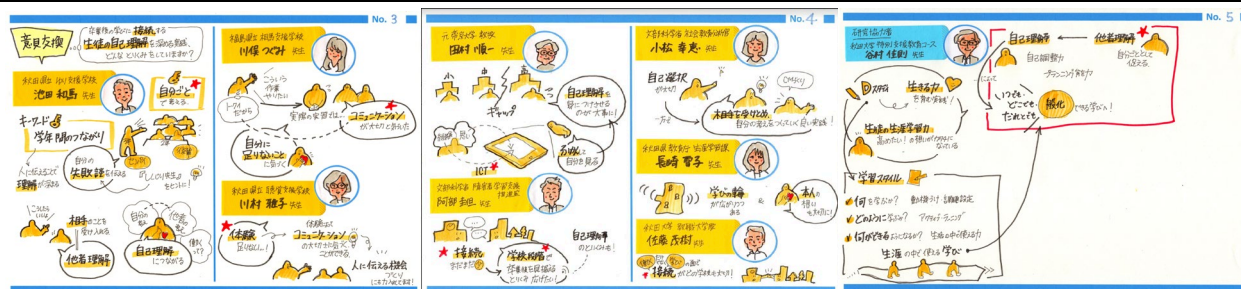


図5 意見交換の記録

今年度の実践から、高等部では自己理解を「自分の強みや得意なこと、得意な学び方が分かる」と定義した。高等部段階で自己理解を深めることは、学習指導要領で示されている「学びに向かう力、人間性等の涵養」と同様に、生徒の「生涯学習力」を高める上で、他の要素と関連させて働かせるべき重要な要素であると考えます。高等部卒業後、社会の中でよりよく生きていくためには、在学中に身に付けた力を様々な場面で般化し、生活の中で生かしていくことが必要である。自分の強みや得意なことが分かれば、学校を離れても様々な場面で安定的に再生・実行することができるのではないかと考える。また、得意な学び方が分かれば、自分から新たな学びに取り組み、新たな力を獲得していくことができるのではないかと考える。次年度も今年度の成果を生かし、生徒の「生涯学習力」を高められるように実践を重ねていきたい。